

物語としてのナショナリズム

－ 前近代・近代・現在そして未来 －

前田雅之*

目次

- I. はじめに
 - I.1. 脱民族主義＝普遍主義 → グローバリズム＝アメリカリズムという冗談 → 東アジア共同体＝新たな冊封体制という冗談
 - I.2. 脱民族主義に向かうためには民族主義・自国優越意識の考察が不可欠
- II. カール・シュミットの呪縛－国民国家の存立と敵＝他者
 - II.1. 国家の存立にとっての敵＝他者の必要性
 - II.2. 国民国家とナショナリズム
 - II.3. ポピュリズムとナショナリズム
- III. 日本における二つのナショナリズム－前近代と近代以降
 - III.1. 前近代日本における自国優越意識・劣等意識・世界観
 - III.2. 近代のナショナリズム
- IV. おわりに－脱民族主義への過程

I. はじめに

- I.1 脱民族主義＝普遍主義 → グローバリズム＝アメリカリズムという冗談
→ 東アジア共同体＝新たな冊封体制という冗談

民族主義を脱して何に向かうのか。その答えは残念ながらまだない。安易な答えは、アメ

* 東京家政学院大学 人文学部 教授

リカニズムと同義である「グローバリズム」であれ、東アジア共同体という名の新たな「冊封体制」であれ、はたまた、過去の日本が唱え、敗戦によってかなく消え失せた「大東亜共栄圏」であれ、いずれもうまくいかず、矛盾と対立を大きくするだけで終わるだろう。

それでは、脱民族主義は普遍主義に基づく民主主義となるか。だが、これもどのような民主主義かがはっきりしていない。人口の多少・富の多寡・地域性・文化伝統の差異等を超えた民主主義は可能なのであろうか。アメリカがイラクで行っている「民主化」と呼ばれている「アメリカ流民主主義」の押し付けがどれだけ多くの代償と人的犠牲を払っているかを考えるだけでも、その困難さは想像できる。対象を東アジアに絞ってもそこで共有される民主主義は可能であらうか。これも難しいといわざるを得ない。

他方、脱民族主義を達成したと思われているEUも、キリスト教・白人という共通基盤をもっており、今後うまくいかは未知数である。EUはもともと対米・対露によって結合したものであり、実質は、ドイツ・フランスが中心である。現在EUに組み込まれている旧東欧は両国の下請け地域にならざるをえないだろうから、EU内部の国家間格差は解消していない。

但し、イスラーム圏のトルコがEUに入るとなると、状況が劃期的に変わるだろう(しかし、加入は難しいのではないか)が、各国の民族主義も健在(ドイツのネオナチは旧東ドイツ地域に多い)であることに加えて、非ヨーロッパ的なアラブ系イスラームの人口は増大の一途を辿っており、その方がフランスなどは脅威であるかもしれない(フランス右翼の対応など)。EUによる脱民族主義の達成はいまだしの感が深い。とはいえ、旧ユーゴスラビアのような内戦はないだろうが。

1.2 脱民族主義に向かうためには、民族主義・自国優越意識の考察が不可欠。

ナショナリズムはいずれも「想像の共同体」(Imagined Communities、ベネディクト・アンダーソン、1987年、原著83年)の産物だが、アンダーソンは決してナショナリズムに基づいた国民＝国家的な想像が具現化したを批判しているだけではない(部分的には肯定的である)。ポスト国民国家の理念も具体像もまだぼんやりしたままである。仮にあるとしても、過去の「想像の共同体」が終われば、新たな「想像の共同体」に向かうだけではないかという懸念は否定できない。それならば、よりよい「想像の共同体」に向かうためには、想像であれ、共同幻想であれ、ナショナリズムの歴史的来歴と構造を追究する必要があると思われる。

II. カール・シュミットの呪縛—国民国家の存立と敵 = 他者

II.1 国家の存立にとっての敵 = 他者の必要性

二〇世紀を代表する思想家の一人であるカール・シュミット(1888~1985)は、「敵とは、競争相手や相手一般ではない。また反感をいただき、にくんでいる私的な相手でもない。敵とはただ少なくとも、ときとして、すなわち現実可能性として、人間の総体—他の同類の総体と対立している—なのである。敵には、公的な敵しかない。」(『政治的なものの概念(Der Begriff des Politischen)』、田中浩・原田武雄訳、1970、原著は27、上記は32年版に拠る。以下の引用も同じ)と指摘した。

シュミットにとって、敵とは公敵(hostes)の意味であり、私敵(inimici)ではない。そして、公敵が「国家」を存立させる不可避の他者であるとされている。それは、「敵とは、他者・異質者にはかならず、その本質は、とくに強い意味で、存在的に、他者・異質者であるということだけで足りる」と指摘されるとおりである。

つまり、敵とは無根拠性に特徴があるということだ。むしろ、いうまでもなく、国家も敵も、吉本隆明言うところの「共同幻想」であり、私が言うところの「物語」でしかない。そこには実証された根拠など必要ないし、また、見出せないだろう。時折、根拠を求めて、歴史的な搜索が行なわれるが、発見された「史実」を今日に結びつけるのは概ね「物語」である(日本の天皇の系譜では、中世まで「神功皇后」が天皇に入っていた。近代以降、南北朝の南朝を正統としたことは、いずれも時代の要請によって作られた「物語」に従ったまでである)。これは世界のどの地域にも該当するだろう。

シュミットはまた、「ここで問題なのは、擬制や規範ではなく、この[友・敵]区別の存在としての現実性と現実的可能性なのである。その期待や教育的努力に共鳴しようとしまいと、諸国民は、友・敵の対立にしたがって結束するのであり、この対立は、こんにちなお、現実に存在するし、また政治的に存在するすべての国民にとって現実的可能性として与えられているものである。」

「もしも、国家内部において、党派政治的対立がまったく政治的対立そのものになってしまうならば、そのとき、「国内政治的」傾向は、最高度に達する。すなわち、対外政治上のではなく、国内的な友・敵結束が、武装対決にとってのきめ手となる。こと政治であるかぎり、つねに存在せざるをえない闘争の現実的可能性が、このような「国内政治優位」のば

あいには、論理必然的に、もはや組織化された諸国民単位(国家ないし帝国)間の戦争ではなく、内乱となって現われるのである。」

「敵という概念が意味をもち続けるかぎり、戦争が具体的可能性として存在し続けなければならないのである。」

と述べている。要するに、敵がいないと、国民は結束しないから、敵によって国家の内部統一がはじめて達成できるということだ。

内乱は、国内が鋭い対立状況になっている時に起るものである。その場合、敵を外部に想定する、ないしは、ナチのユダヤ人政策のように国内の異分子を敵として対処することが多い。いずれの場合も、劣等感と優越感が表裏一体となったナショナリズムを煽るか、ナショナリズムに基づいて行なわれることになるだろう。

国家とそれを存続させるための敵(公敵)がある限り、戦争は可能性として常に存在し続ける。但し、シュミットが言うように、「戦争は、現実可能性としてつねに存在するなのであって、この前提が、人間の行動・思考を独特な仕方規定し、そのことを通じて、とくに政治的な態度を生み出す」のだ。シュミットはナショナリズムには言及していないけれども、「独特な仕方」がナショナリズムと連結する可能性は高いというべきだろう。

II.2 国民国家とナショナリズム

は、近代ヨーロッパに生まれ(一応、原則は一民族・一言語・一宗教、但し、それが該当するのは、人口30万人弱のアイスランドくらいしかないが)、国民によって支えられ、通常の場合、理念上は、国民が国民を支配するところにみられる平等性、即ち、「同一性」の神話に基づく民主主義に基づいている(シュミット『憲法論(Verfassungslehre)』、みすず書房、1974年、原著28年)。

さらに、国民国家は、国民に納税・義務教育、さらに戦争等において負担や犠牲=死を要求する国家でもある(前近代国家では、国のために死ぬという観念は、少なくとも、アジアでは前近代では、希薄である。中世ヨーロッパについては、碩学カントーロヴィッチの『祖国のために死ぬということ』、みすず書房、1993年参照)ことは見落とせない。

そこから、国民国家を維持するためにはナショナリズムや愛国心を教育の場等を通じて宣揚させると共に、国のために死んだ人間を国家的に追悼する施設や行為が行なわれることと

なる(「無名戦士の墓」など、「靖国神社」もその一つだが、靖国の始まりは「鎮魂」に主たる目的が置かれた)。これも国民国家の維持・発展に付帯する運命的事態といつてよい。

3、ポピュリズムとナショナリズム

財産も教養ももたない人間(mass)が普通選挙の施行によって国家の政治に参入してくるようになると、多数の支持を集めるために、大衆迎合(ポピュリズム)が半ば必然的に登場するようになる。

ハンナ・アーレント『全体主義の起源(The Origins of Totalitarianism)』(みすず書房、1972年、原著51年)によれば、ギリシャ的な「公」(政治・ポリス)と「私」(家庭)の間に、両者を引裂くようにして「社会的なもの」が拡大する近代社会になると、公私の関係が曖昧になり、そこから、反ユダヤ主義・ファシズム・スターリン主義といった全体主義が現われるという。

ポピュリズムもナショナリズムと結びつけば、容易に、全体主義的な相貌を呈する。大概、ナチスドイツのように国民の圧倒的な支持があるから、その方向性を変えるには敗戦・体制瓦解でもないと難しい(戦前日本の日中戦争期以降から敗戦に至る国家体制が、ファシズムであるのかどうなのかは学界レベルで今も決着していないが、少なくとも陸軍をマスコミ・国民が支持していたことは確かだろう。但し、独裁的と言われた時の首相東条英機が対米戦に至るまで海軍の石油備蓄量を知らないなど、ヒトラーのような独裁者ではないし、独裁者ないしは彼の所属する陸軍が国家を完全に支配していたわけではない)。シュミットが言うように、独裁は民主主義の成果の一つである(独裁がなかったということで見れば、戦前の日本は民主主義ではなかったともいえる)。

ポピュリズムないしは民主主義的独裁(委任独裁)を防ぐためには、明治憲法のような分権的統治システムをとるか、もしくは、シュミットのいう「制度的保障」(国家の来歴と正統性ないしはそれを支える目に見えない制度 = Institution)を守るために、民主主義的政体のなかに、ある者や組織に非民主主義的な特権を与えることをするしかないだろう(石川健治『自由と特権の距離 カール・シュミット「制度的保障論」再考』・日本評論社、1999年参照)。

とはいえ、ワイマール憲法下でナチスは合法的に全権力を掌握したから分かるように、独裁・ポピュリズムを防ぐことは、実際のところなかなか以て難しい。戦前期日本の場合は、天皇に名目上権力が集中しすぎていて(天皇自身は自分の意志を例外情況以外では示さない = 立憲君主)、実質権力の中でどこに権力があるのかが甚だ不明確(総理大臣 = 他の国务大臣は同じ権力しかなく平等であり、総理大臣と他の権力者たち—参謀総長・軍令部総長・

衆議院・貴族院議長・枢密院議長—との関係も対等というしかなかった)であり、国家の統一意志を表わすためには、元老という超憲法的調停者を必要とした。

昭和に入り、元老(西園寺公望)のもつ調整能力が低下し、恐慌・満州事変等の政治的・経済的危機などあり、陸軍の権力が拡大したが(同時に無産政党も擡頭していることに注意されたい)、かといって、前述したように、陸軍が全権力を把握したわけではない。陸軍にとって、内なる最大の敵は同等の権力をもつ海軍であった。故に、独裁が完成しなかったともいえる。

逆に言えば、民主主義的で首相および彼が所属する政党の権力が明治憲法に対して圧倒的に強い日本国憲法下の方が、独裁やポピュリズムは起りやすいのだ(但し、最高権力者と議会が分裂するという権力の二元化を防いでいるのは、長谷部恭男『憲法とは何か』<岩波書店、2006>も指摘するように、議院内閣制のよさとして評価できるが)。

おそらく、近代日本におけるポピュリスト第一号は大隈重信、第二号は近衛文麿であろう。いずれも異様に国民に人気があり、たいした政治家ではなかったことに加えて、国家を危機に追い込んだことでも共通している(大隈=対華二十一か条要求、近衛=日独伊三国同盟)。

Ⅲ. 日本における二つのナショナリズム—前近代と近代以降

Ⅲ.1. 前近代日本における自国優越意識・劣等意識・世界観

① 反転の構図—和漢・三国(天竺・震旦・本朝)と日本

ここでは、古代・中世の日本が<日本>をいかにこしらえてきたかを見ておきたい。

島国である日本は、自国のありようを自らがこうだと考える外国、あるいは、実際には見ることができない外国の視線によって表象されるしかなかった。その外国とは、和漢(日本と中国)と三国(インド・中国・日本)という日本人が作った言葉に見られる中国とインドであった(奈良時代以降、朝鮮半島—新羅—は内なる外国に入らない。それは、律令によって、理念レベルで唐と日本を対等にした結果だと思われる。実際、遣唐使—日本では対等関係における国使だが、中国では朝貢と見ていただろう—に見られるように、官人・僧は唐に直接赴いている。新羅との関係劣悪が効いてもいる)。

和漢・三国の世界観が成立したのは9世紀である。9世紀こそ、律令体制が「古典的国制」(吉田孝『日本の誕生』、岩波新書、1997年)として変容・定着するようになっていく準備段階に相当していた(これを「古典日本」の成立と見てもよい)。

和漢の構図は、もともと、[和=日本<漢=中国]という不等記号で関係づけられていた。しかし、この不等図式は、時代を経過しながら、[和<漢]→[和>漢]→[和<漢]→[和>漢](途中まま[和=漢]も入る)といった優劣の反転を繰り返し、近代の大正期(1920年前後)にいたって漢詩壇が崩壊し、消滅する。

他方、近代以降は、これに変えて、[日本<西欧]→[日本>西欧]、敗戦後は、[日本<アメリカ]→[日本>アメリカ]を繰り返す。これらの図式や反転はいずれも劣等感と優越感が表裏一体になった感情から生まれたものであろう。

[和<漢]の関係を最終的に超克するためには、第三項を必要とする。これがインド(梵・天竺)である。ここから、古代から中世において、[和=漢=梵](+と-)、[梵・漢>和]、[和>梵・漢]といった四つの図式が出来上がった。

- 1、本朝仏法>天竺・震旦仏法(『教時諍』→『三宝絵』)
- 2、三国仏法繁栄(+)(『今昔物語集』)
- 3、本朝仏法<天竺・震旦仏法(覚憲『三国伝灯記』)
- 4、三国仏法衰退(-)(延慶本『平家物語』)

拙稿「和漢と三国—古代・中世における世界像と日本—」(『日本文学』、2003年4月)

但し、上記の図式に入らない、[和=梵>漢]といった和漢の図式が混淆した自国優越意識(慈円→聖岡)あったし、さらにもっと進んで、三国は日本から生まれたとする15世紀の吉田兼俱の説(「吾ガ日本ハ種子を生じ、震旦は枝葉ニ現はし、天竺は花実を開く。故ニ仏教は万法の花実たり。儒教は万法の枝葉たり。神道は万法の根本たり」『唯一神道名法要集』)という極論(通常、反本地垂迹説と呼ばれるが、仏本神迹に対して神本仏迹と言った方が適切である)が生まれているが、[和=漢>梵]という図式がないことを見ると、いずれも中国(漢)に対する劣等感をいかに克服するかが最大の課題であったことが分かる。

それでも、不可視の他者の視線(むろん、日本人がそうと考えている他者であり、中国・インドが日本に対して抱くリアルな視線や観念は関係がない)を介して日本は表象されていたが、そのような回路を通して日本は<日本>たろうとしていたことは間違いない。なお、そうし

た自国認識は、薩摩と清に朝貢しながら、<琉球>たろうとしていた琉球王国、明・清に朝貢していた朝鮮もあつただろう。表象のされ方が異なるだけではないか。

前近代ナショナリズムを捉えるには、このような他者の目を介して形成される自己像を押さえる必要がある。

② 和歌をめぐる

和漢・三国の構図でもっとも<日本>を打ち出したものは和歌である。和歌(倭歌とも書く)とは「漢詩(中国の詩)」に対する「日本の歌」という意味であり、『古今集』(延喜五年・905年)編纂のころに作られた言葉である。それまでは単純に「歌」といった。

そこで、和歌における日本意識・和漢・三国を見ておくと、このような和歌がある。

もろこしの代はうつれど敷島ややまとしまねはひさしかりけり

(『千五百番歌合』・祝・千五十五番(右)・二一六九・源通親)

ここには明確な中国よりも優れた日本を主張したい意図がある。

しかし、日本が中国よりも優れるとする和歌は例外的であり、きわめて数が少ない。多くは、

「やまとより来りと聞けどから衣ただもろこしの心ちこそすれ」(『和泉式部集』・五二〇)「わが恋はもろこしまでやきこゆらんやまとの国にあまる心は」(『江帥集』・二四六)「よにしらぬこひする人のためしにはこまもろこしとつたはりやせん」(『六条斎院歌合』・一〇)

といった例であり、ここでいう「もろこし」「こま(高麗)」は「遠いところ」という意味しかない。そこから、和歌とは、ほとんど外国を意識しない国内完結型の言説だったのではないかという見通しが成立する。

中世において、和歌は、院・天皇の下に公家・寺家・武家といった権門が織りなす「公」秩序を繋ぎ一体化する役割を果たしていた(これを私は「古典的公共圏」と呼んでいる)が、詠まれる和歌は、題・和歌ことばともに、伝統的なものであった。和歌を詠むことは、高僧であれ、武家の将軍であれ、自明のことであり、なおかつ、一人前の大人(=公人)の証であったが、そこでわざわざ「日本」を意識することはなかつただろう。

これに対して、和歌の注釈、とりわけ、『古今集』序の注釈には、和漢・三国の構図が見られる。これらを整理すると、以下のようになる。

- 1、和漢世界を前提に置き、和歌と漢詩を同一と捉える和歌漢詩同一論(藤原清輔『奥義抄』・顕昭『古今集序注』・藤原為家『古今序抄』など)
- 2、和漢ではなく、三国世界(天竺=インド・震旦=中国・本朝=日本)を前提に置き、梵語(偈)・漢語(漢詩)・和語(和歌)にある言語間隔差を、「天竺ノ言ヲ唐土ニヤハラゲ、唐土ノ言ヲ日本ニヤハラグルヲ、三国ヤハラゲタル故ニヤマト歌ト云」(『毘沙門堂本古今集注』、片桐洋一編)うとあるように、梵語(天竺ノ言)を「和らげ」たのが漢語(唐土ノ言)、漢語を「和らげ」たの和語=和歌であるとする、即ち、梵語・漢語・和語を順次アナロジーして同一であると主張する梵漢和語同一論(他にも、『三流抄』・冷泉家流『京都大学蔵古今集註』など)。なお、梵漢和語同一説にはさらに慈円(北畠親房・聖岡など)の梵語=和語として、漢語=中国を無化するヴァージョンもある。
- 3、外国人(婆羅門僧正)・菩薩などが来朝すると和歌を詠む、即ち、日本とは他者=外国人・菩薩をも和歌を詠ませるトパスであると捉えたところから立ち上げられたとする和歌=日本論(源俊頼『俊頼髓脳』・藤原俊成『千載和歌集』「仮名序」、『古来風躰抄』・京極為兼『為兼卿和歌抄』・一条兼良『新統古今和歌集』「仮名序」)。(拙稿「日本意識の表象—日本・我国の風俗・「公」秩序—」、『和歌をひらく 第一巻 和歌の力』、岩波書店、2005年)

1(和=漢)・2(梵=漢=和、和=梵>漢)・3(和歌=日本)の中で、外国人が日本に来ると(実際には一人しか来ていないが、また、婆羅門僧正が和歌を詠んだのはむろん虚構であろうが、それは今日でいう史実と考えられていた)、和歌を詠むという観念は、和歌が詠まれるところは日本であるという観念につながる(西行の東北旅行は錦仁がいうように、東北の日本化か、それを倣ったのが芭蕉の『奥の細道』だろうか。また、15世紀半ばの書写である叡山文庫本聖徳太子伝十歳条では、蝦夷が蝦夷語で和歌を詠む)。

さて、和歌の実作における対外意識の欠落と、和歌とは何かを語る『古今集』序等に見られる強烈な対外意識とのギャップは、前近代日本において、ナショナルな感覚が一定していなかったということを物語っていよう。つまり、和歌とは何か、日本とは何かと問われるまでは和歌も日本も、ましてや外国などさして意識に上らないということである。こうなった理由としては、島国であったこと、中国の冊封体制には入っていなかったこと、形式的には天皇が政治・文化の頂点に位し、基本的にはホモジーニアスな民族性が大きいのではないか。

Ⅲ.2. 近代のナショナリズム

① 幕末の危機—騒いでいたのは一部だけ

西洋列強(露・英・米・仏)がアジアに進出(侵略も)し、日本を脅かし始めた18世紀後半から19世紀前半にかけて、幕府の権力者・役人・学者・地方の藩士の一部は、対外意識に目覚め、これが幕末の尊皇攘夷に繋がっていく。しかし、国民的運動になったわけではない。当時は国民という意識なかった。尊皇攘夷運動の思想的基盤は、国学・水戸学だろうが、幕府の御三家の一つである水戸藩が『大日本史』を作り、尊皇思想を鼓舞したことは、幕府と朝廷は対立的関係でなかったことを物語っている。両者が対立するなど当初は考えられてもいなかったはずである。

② 国民国家の形成—文明開化とアジア主義

1) 国民の誕生

1894～95年、朝鮮の地位を巡って、日本と清との戦争があった(日清戦争)。この戦争の過程で、日本人は、はじめて日本国民という意識をもったのではないか。それまでは、江戸っ子、長州人という住む土地への帰属感、ないしは、真宗門徒といった宗教団体の構成員しかなかったろう。その後の三国干渉、日露戦争(1904～05年)を経て、日本国民は名実共に完成した。つまり、外国(清・露)を敵とすることによって、ばらばらだった日本の人々は日本人となったのである。

2) 欧化主義とアジア主義

明治政府は当初から西欧列強に伍する国づくり(殖産興業・富国強兵)を目指し、条約改正問題もあって、極端な西欧化(鹿鳴館時代1883～90年など)を進め、近代化に乗り出した(法制・軍事・学校・産業整備など。ちなみに、試験の厳正さと成績でエリート選抜—国立・軍関係の学校では裏口入学といった不正行為は一度もなく、成績さえよければ、洪思翊のように朝鮮出身でも陸軍中將にする、四年に一度行なう選挙は買収・選挙違反は多々あったけれども、票数ごまかしはなかった等を見ると、ある面、極めて律儀に近代化を行なったこと

が窺える。さらに、近代化に並行して古典を捨て去った。近代以降、教養は和漢の古典から西洋の文学・思想に変わっていった。

これには、先に民権を優先したいという自由民権派(実は隠れ国権派である)と従来の日本が壊されていくという保守派が反対し、後者がアジア主義者となった。アジア主義者の原像は、明治維新の立役者であり、西南戦争(1877年)で敗れた西郷隆盛だろう。つまり、維新後、反西欧的近代を目指した負け組がアジア主義(アジアとの連帯を叫びつつ、侵略にも加担する人々、頭山満、内田良平など)となり、いわゆる「右翼」となっていく。但し、アジアの革命家の面倒を見たのはほとんど彼らであり、単に否定するのは問題である。

欧化主義とアジア主義(日本主義・国粹主義も含む)の対立は、やはり反転の構図を描く。これに加えて、大正期に入ると、民本主義・社会主義が加わり、社会的階層として「大衆」も成立する。自由民権派の大部分がアジア主義や国権論者になっていったように、社会主義者も満州事変を支持した無産政党などを見ても分かるように、反体制の人々も反政府的ではあったが、「愛国者」(例外的なのは徹底的に弾圧された共産党だが、彼らはソビエト・コミンテルンへは忠実だった)であり、戦後の左翼とは異なっていた。

だが、国民・大衆の大部分は、日々の生活をそれなりに暮らしていただけだろう。彼らに火をつけたのは、普通選挙を通じた政治家の活動以上に、マスコミ(新聞・雑誌)ではないか。新聞記者の多くは特定の政治家・運動家と関係を持っていた。戦争を最大限煽ったのは陸軍ではなく新聞であった。

第一次大戦を見て、総力戦構想を昭和初期に唱え、その後、陸軍の中枢(軍務局長)を占めるも、陸軍の反主流派(皇道派)の一軍人に暗殺された永田鉄山(1884~1935)は、戦争は現代では国民の支持がないと起こせないと断言し、総動員体制を整備していったが、他方、そのためには福祉社会の拡大、朝鮮独立が必要と認識していた。永田などのエリート官僚は右翼ではない(まして左翼ではありえない)。帝国主義者ではあったろうが、総動員体制は国民国家の充実と民主化を必要としたと考えていたことは間違いない。また、日本を中心とした平等互惠に基づくアジア共同体を米英ソに対抗して作ろうとしていたのではなか(石原莞爾「東亜連盟」などもこれに近い)。

③ 鬼畜米英から「ギブミー・チョコレート(Give me chocolate)」へ

あれほどの戦死者(約230万人、七割は餓死・病死だが)と国内の死者(空襲等で死んだ

人間は80万人以上、広島原爆では年内までに約14万人の死者が出た)を出し、国民の支持に支えられて闘ったにも関わらず、天皇の「聖断」で負けてしまうと、アメリカ占領軍(進駐軍といった)に対する抵抗などほとんどなく、極めて従順であり、逆にアメリカ兵にチョコレートをねだる少年(元軍国少年)が多く現れた。政府の配給だけで暮らして餓死したのは一人という現状からも、食うためには何でもやったのが、当時の日本人である。

通常、現在のイラクのような占領軍に対する抵抗運動があるはずだが、ほとんどないところから、日本人のナショナリズムも国民の心の奥底には届いていなかったと思われる(食うことの方が大問題だったか)。それでも、天皇に対する敬愛の念は、一部の左翼を除いてその後も衰えることはなかった。天皇に対する敬愛が決して他国に対する憎悪にいかないところがこの国のナショナリズムや「愛国心」の特徴だろうか。

④ J(JapanあるいはJunk)への回帰あるいは他者の喪失

戦後は基本的にアメリカによって防衛・外交を握られていたから、日本は半植民地といってもいい状態であり、これが今日まで続いている(日本国という国名は、「憲法」によって命名された)。

だが、経済的には発展し、世界有数の経済大国になった。戦後しばらくはアメリカ文化の影響が強かったが、90年代以降、ジャパン・アズ・ナンバー1(Japan as NO.1)と言われたからではないだろうが、アメリカへの憧れは急速に落ち込み、若者が好む音楽も圧倒的に日本の歌手と歌になっていった。ブランド趣味も西欧への崇拝が根柢にあるとは思えない(タレントがそれをもっていたら、真似をするという意味で、タレントへの憧れはあるか)。

かといって、日本至上主義者や過激なナショナリストが増えたかといえば、そうではない。反韓・反中の人たちの数はたいしたことなく、概ねの人々は両国に対して関心もさしてない(ドラマ・タレントには関心がある人もいる)。前首相の靖国参拝などの行動に対して、韓国・中国が批判し、それに呼応して、反韓・反中の意見が集まるが、一過性(場当たりの)である(すぐに忘れる)。

つまり、アメリカに従属している認識もなく、とりたてて韓国・中国に対する敵対意識もないのが日本の多くの人々の現状ではなかろうか(アメリカの占領政策の成功ともいえる)。これを「他者の喪失」と言ってもよいだろう(世界は日本と同じだという妄想)。中国の反日デモに対して抗議デモもない(イラク戦争反対のデモは、500人程度、アメリカ・ヨーロッパとは比較に

もならない)。

こうした体質は、おそらく前近代から引き継いだものではないか。外交下手や国際感覚の欠落(海外渡航者は1500万人いるが)もその一つとはいえないか。

こうしてみると、日本のナショナリズムはかなり脆弱であることが分かってくる。これは前述した島国という運命的な地政学的位置も関係しているが、脆弱さをまとめてみると、以下のようになろうか。

まず、「ただそこにある日本一千代に八千代に一」という国家観が濃厚なことである。日本は、別段理由も根拠もなく、そこにあり、それは永遠に(千代に八千代に)続くだろうと皆が考えているということである。こうした観念からは、和歌の詠作にあるように、強いナショナリズムは生まれにくいし、また、脱ナショナリズムも存在しない。日本は空気のように漂っているだけである。

次に、反米から反中・反韓の気分に分らなように、「一過性的に揺れやすい=情緒的体質」が日本人には強いということである。「鬼畜米英」と憎みながらも、これほどアメリカが好きになった国民もあまりいないし、現代ではアメリカはどうでもいいと思っている人が以前よりも多い。これも、前記と重なるが、強いナショナリズムが生まれにくい体質と重なっている。但し、時に結束し、その時は、対米戦に見られるように、驚異的な頑張りを見せるが、今の日本ではそれはないだろう。思想というよりは気分が支配する国と国民である。

第三に、「罪悪感もないが、恨みもあまりない」という体質を上げておこう。日本人は、韓国人や中国人に対してあまり罪悪感をもっていない。と同時に、原爆を落とし、激しい爆撃で無辜の民を虐殺したアメリカに対してもあまり恨みも抱いていない。これも世界的には見れば、妙な国民ということになるが、当の日本人は何ら不思議にも感じていない。前述したホモジーニアスな体質もあるが、旧植民地に対しても、帝国大学を作り、成績がよく実力があれば、軍や役所の幹部に採用していくのも、このような意識からだと思われる(むろん、差別感はあるが、欧米人ほどではないということだ)。

IV. おわりに一脱民族主義への過程

最後に、私が考える脱民族主義に至る場合の条件を述べてみたい。

まず、「物語としてのナショナリズムの相互承認」ということである。隣国同士が相互のナショナリズムをあくまで国民の物語として承認すること、これがないと、対立はひどくなるばかりだろう。

第二に、「史実と物語の分離を踏まえての冷静な議論」が必要だということである。係争中の問題については、歴史的に客観性のある事実(=史実)で議論しなくては意味がないというよりも、正義に反するだろう。一方の物語としてのナショナリズムとは区別して議論される必要がある。現在、日中・日韓で共同の歴史認識作りが試みられているが、あまり成果がないだろう。どうしても物語に影響されるからだ。それよりも、当該国+無関係な外国の研究者を交えて、史実を冷静に解析した方がよい。但し、その場合、当該国に不利益な結果になろうとしても、それに耐える合理主義精神と寛容さが必要だが、これが一等難しいだろう。

第三に、ナショナリズムを一等煽る「ポピュリズムの暴走を防ぐシステム」を国家・国民が叡智を絞って構築する必要がある。これを達成さえすれば、過激なナショナリズムが国民的レベルで高まることはない。

第四に、対外関係について、「能天気な友好から長所短所を知り抜いた信頼へ」という常識をもつようにしたい。世界中見渡しても、隣国はどことも仲が悪いものである。これを分かっている以上、必要以上に、対立をしなくて済むのではないか。過度な期待や愛情は簡単に蔑視・憎悪に変わるから要注意である。

そして、最後に、私なりのささやかな処方箋ないしは構え方を述べて、本稿を閉じたい。

まずは、マックス・ヴェーバーがいう「価値自由」の地平に戻ることである。山之内靖「価値自由」とは、社会科学の営みがこのような「理念型」の提示であらねばならないことを認めたうえで、他の「理念型」の構成に対しても開かれた態度で接するということ(『マックス・ヴェーバー入門』、岩波新書 1997年)と述べている。これは、自己の考えや自己の属する社会のもつ理念(「理念型」)が相対的存在に過ぎないと自覚しつつ、他者に耳を傾け、自己および他者を批判しつつ、よりよいものを目指していく。近代国民国家でナショナリズムを克服していけるとすれば、これ以外方法はない。

しかし、ヴェーバー自身が長く神経症を患ったように、こうした思考と議論は、自己および自己の所属する国家・民族・集団に纏わる劣等感・卑屈さ・嫉妬のみならず、誇り・プライド・優越感をも吹っ飛ばす相対化と理性化の過程であり、言うまでもなく、艱難辛苦の道程である。

次に、自国と他国の過去にアイロニカルな共感を相互に持つことである。こちらの方がヴェーバー的「価値自由」に較べて、まだ達成可能ではないか。

とはいえ、自国・他国のナショナリズムの物語を承認しつつ、物語と史実の差異、自国の肯定しにくい部分も直視して、それらを受け入れるにはある種のアイロニーを必要とする(あ

の時代であるように決断したのは、愚かではあったが、しかし、致し方ない面もあったかな、といった意識である)。それが可能なのは、ある程度以上の知性とそれに見合ったユーモア(余裕感覚といってもよい)を必要とする。

全国民をインテリにできないのが国民教育であるし、教育は計算と基本的リタラシーを除いて、高等教育になればなるほど、達成率は低くなるから、これもやはり難しいというだろうが、私としては、この立場に立ち、東アジアの今後をほんの少しの希望を持って展望してみたい、と考えている。

参考文献

(あいうえお順)

アンダーソン・ベネディクト(Anderson, Benedict)、『想像の共同体—ナショナリズムの起源と流行』(Imagined Communities)、白石さや・白石隆訳、N T T出版、1987年(原著1983年)。

アーレント、ハンナ(Arendt, Hannah)、『全体主義の起源』(The Origins of Totalitarianism)、大久保和郎・大島通義・大島かおり訳、みすず書房、1972~74年、原著1951年。

石川健治、『自由と特権の距離カール・シュミット「制度的保障論」再考』、日本評論社、1999年。

稲田正次、『明治憲法成立史』(上下巻)、有斐閣、1960年。

ヴェーバー、マックス(Weber, Max)、『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』(Die protesutantische Ethik und der Geist des Kapitalismus)、大塚久雄訳、岩波書店、1989年、原著1920年。

桶谷秀昭、『昭和精神史』、文芸春秋、1992年。

加藤陽子、『模索する1930年代—日米関係と陸軍中堅層』、山川出版社、1993年。

加藤陽子、『戦争の論理—日露戦争から太平洋戦争まで』、勁草書房、2005年。

古賀敬太、『シュミット・ルネッサンス』、風行社、2007年。

小路田泰直、『憲政の常道—天皇の国の民主主義』、青木書店、1995年。

小路田泰直、『国民<喪失>の近代』、吉川弘文館、1998年。

坂井雄吉、『井上毅と明治国家』、東京大学出版会、1983年。

シュミット、カール(Schmitt, Carl)、『政治的なものの概念』(Der Begriff des Politischen)、田中浩・原田武雄訳、未来社、1970年、原著1927年、但し、本書の版は1932年版に基づく。

シュミット、カール、『憲法論』(Verfassungslehre)、阿部照哉・村上義弘訳、みすず書房、1974年、原著1928年。

カントロヴィッチ、エルンスト・ハルトヴィヒ(Knatrowicz, Ernst Hartwig)、『祖国のために死ぬこと』、甚野尚志訳、みすず書房、1993年、原著論文1951・1955・1961年。

- 鳥海 靖、『日本近代史講義—明治立憲制の形成とその理念』、東京大学出版会、1988年.
- 西部 邁、『無念の戦後史』、講談社、2005年.
- 長谷部恭男、『憲法とは何か』、岩波書店、2006年.
- 萩原延壽、『自由の精神』、みすず書房、2003年.
- 福田和也、『近代の拘束、日本の宿命』、文芸春秋、1993年.
- 前田雅之、「和漢と三国—古代・中世における世界像と日本—」、『日本文学』、2003年4月号.
- 前田雅之、「中古・中世における「日本意識」の表象—和歌・〈日本〉・起源—」、『上代文学』92、2004年4月.
- 前田雅之、「政治神学と古典的公共圏—パウロ・空海・和歌—」、『日本近代文学』71、2004年10月.
- 前田雅之、『記憶の帝国—【終わった時代】の古典論—』、右文書院、2004年.
- 前田雅之、「日本意識の表象—日本・我国の風俗・「公」秩序—」、『和歌をひらく第一巻 和歌の力』(渡部泰明編)、岩波書店、2005年.
- 前田雅之、「井上毅と北村透谷—「近代」と「東洋」の裂け目から」、『国文学解釈と鑑賞別冊] 北村透谷 批評の誕生』(新保祐司編)、至文堂、2006年.
- 丸山眞男、『戦中と戦後の間』、みすず書房、1976年.
- 丸山眞男、『自己内対話』、みすず書房、1998年.
- 三谷太一郎、『日本政党政治の形成—原敬の政治指導の展開』、東京大学出版会、1967年.
- 三谷太一郎、『近代日本の戦争と政治』、岩波書店、1997年.
- 保田與重郎、『近代の終焉』、小学館、1941年.
- 山之内靖、『マックス・ヴェーバー入門』、岩波書店、1997年.
- 吉田孝、『日本の誕生』、岩波書店、1997年.

< 요약문 >

‘이야기’ 로써의 내셔널리즘
- 전근대 · 근대 · 현재 그리고 미래 -

마에다 마사유키(前田雅之)

탈 민족주의(transnationalism)을 어떻게 파악하고 어떻게 실천할지를 생각할 때, 안이하게 글로벌리즘이나 새로운 책봉체제라고도 할 수 있는 동아시아 공동체로 향하기 전에 민족주의나 자국우월주의의 고찰이 불가결하다. 그 경우, 적의 존재가 국가를 형성하게하고, 적에 의해 국가의 내적 통일이 달성될 수 있다고 고찰한 칼 슈미트의 사고로부터 우리들이 아직 해방되지 않았다는 것을 자각해야 하겠다. 거기에는, 대외 배제 · 포퓰리즘의 발생이 내셔널리즘을 기반으로 한 국민국가와 불가결 한 것이 지적되어 있기 때문이다. 우리들은 아직 슈미트의 주박 안에 있다고 해도 좋다.

한편, 일본의 내셔널리즘을 역사적으로 조감해보면, 섬나라여서 리얼한 외국을 모른 채 지낸 것이 영향을 준 것인지, 중국 · 한국에 비해 내셔널리즘의 강도는 매우 약했을 것으로 생각된다. 바꿔 말하면, 그다지 필요하지 않았던 것이다. 전쟁 전, 주로 대외전쟁을 계기로 한 때 내셔널리즘은 고조를 보인 것으로, 전후에는 미국의 반 식민지로서 정착한 이래 대외적 열등감도 감소하고, 지금은 내셔널리즘 없는 내셔널리한 나라가 되었다.

그것들 개개의 사정을 포함해서, 앞으로 동아시아에서 내셔널리즘 극복의 구체적 대책을 생각하기 위해서는 먼저 서로의 내셔널리즘에 대해 아이러니컬한 공감을 가지는 것부터 시작하는 것이 어떨까. 내셔널리즘은 대외적 우열 감정을 베이스로 둔 국민을 묶기 위한 이야기이다.

주제어 : 탈민족주의(脫民族主義) · 국민국가(國民國家) · 타자(他者) · 내셔널리즘(Nationalism) · 화한(和漢)

